

■研究・実践の課題（テーマ）

大学生を対象とした食物摂取頻度調査票の妥当性について

■主任研究者 下方浩史

■共同研究者 徳留裕子、早瀬須美子、三ツ口千代菊、中橋寿美枝

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【目的】

中高年を対象にして開発した食物摂取頻度調査票(Food Frequency Questionnaire: FFQ)の妥当性について、女子大学生を対象に3日間の秤量食事記録調査(Dietary Record: DR)をゴールドスタンダードとして検討する。

【方法】

本学管理栄養学部学生102名を対象に、2014年6~7月に3日間のDR後、FFQ調査を実施した。FFQは、過去1か月の食事を思い出し、102食品について、摂取頻度(7段階)、1回の摂取目安量(6段階)で回答するものである。栄養素等摂取量は、当FFQ用食品群別荷重平均成分表を用い、エネルギー、エネルギー産生栄養素、5つのビタミン、7つのミネラルについて算出した。解析は、データの揃った90名を対象に、両方法による栄養素等摂取量の平均値の比較、相関、摂取量の3分位の一致率・カッパ係数を求めた。

【結果】

両食事調査法による推定平均摂取量のうち、エネルギー、炭水化物、ビタミンB12、葉酸、マグネシウム、鉄については有意差はなく、他の栄養素は有意の差が示された。その差はDRと比較して、ナトリウム -39.1%~ビタミンB12 67.1%で、ナトリウム以外はFFQが過剰評価していた。両食事調査法間のPearson相関係数(Log変換値)は、ナトリウム 0.35~エネルギー 0.64であった。重みづけしたKappa係数(3分位の一致)は、ビタミンB12 0.23~エネルギー0.62であった。

【考察】

FFQによる栄養素等摂取量はDRと比較し、16栄養素(エネルギーを含む)中、9栄養素(56.3%)は有意に過大評価、特にビタミンB12は67.1%もの過大評価であった。ナトリウムは約40%有意に過小評価されていた。ビタミンB12、ナトリウムは、DRとFFQ間の相関、カッパ係数とも低値を示し、この2つの栄養素を本FFQで評価するのは難しいことが示唆された。他の栄養素については、先行研究と同じような傾向を示した。

【結論】

中高年を対象に開発された本FFQは、ビタミンB12、ナトリウムなど若干配慮すべき栄養素があるものの、女子大生にも適用できるものと考えられる。